

<b>Title</b>	9.11、3.11 そして学問の論理：パラドクスとその隠蔽
<b>Author(s)</b>	土方, 透
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.4, 2012.2 : 1-1
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3700">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3700</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 9.11、3.11そして学問の論理 ——パラドクスとその隠蔽——

11年前の9月11日、「テロとの戦い」が始まった。この戦いは、それまでの国家間・民族間の戦いとは異なるものだった。敵の形姿や居場所は特定できず、いわば「見えない敵」との戦いであった。したがって議論は、戦いの方法ではなく、敵／味方の同定の仕方、区分の基準に向けられた。すなわち、「テロと戦う」その点では一致する。では誰と戦うのか？ テロリストは誰か？ テロリストの要件を抽出することが要点となった。

アメリカで施行された「米国愛国者法」(USA Patriot Act) は、テロリストを特定する方法を多方面に開き、それと区別されるところの「愛国者」の保護をその旨とする。そこでは、「愛国者」を保護する目的のもとに国家の権限が強化された。すなわちその目的達成のためには、市民の権利を侵害する、ないしは市民を弾圧するという可能性をも拓くものとなった。ここでは「愛国者（保護）」のタイトルのもとに、包摂（保護）と排除（弾圧）という逆方向のベクトル（パラドクス）が同時に行われている。

本年3月11日、「頑張れニッポン！」というかけ声のもと、日本中が共に痛みを分かち合い復興に立ち向かう一つの運命共同体が形成された。「一つ」の運命共同体は、三人称の被災者を二人称のものとするところから始まった。客観的な第三者ではなく、友人・隣人としての第二者たる被災者である。被災者を第三者として見る態度そのものは、不謹慎なものとして排除される。

二人称で呼ぶという行為には、当然相手から見てこちらも二人称で呼べる存在であることが、「呼ぶ方の側」で予定されている。しかし、いくら二人称で呼びあっても、一人称の痛みは共有されえない。だから、二人称で語られる「協力」「援助」が多勢に無勢で叫ばれるとき、その声の背後に一人称の叫びがかき消されてしまう。このように（二人称としての）「連帯」は、同時に（一人称および三人称の）「排除」としてパラドキシカルに機能する。

この二つは、その目的達成に際する一定の基準において、「市民の保護」「被災者との連帯」という目的達成に際して、保護する必要の「有／無」、被災者との「連帯／非連帯」を区分し、それぞれ善／悪とする。ただし当の区分そのものが「善」であるか否かは、どこにおいても問われていない。はたして、善と悪とを分けることは善なのだろうか。悪ではないのか。これが上述のパラドクスである。

このパラドクスは学問において、近代以降、そして現在でもなお散見される。たとえばフロイトは、無意識を意識によって発見した。ハーバーマスは討議倫理学を討議を経ずに案出した。「大きな物語」の終焉を説いたポストモダンも、その「終焉の主張」を大きな物語とした。そもそも「万物は流転する」という命題は流転を免れているのだろうか。学問の前提の視点に隠された問題が、こうした現実からも見て取れるのである。